

授業協議会記録

1 研究の視点

- 随筆ということを意識させた読みは、生徒に古典の魅力を気付かせたり、内容を深く読ませたりすることに効果的であったか。

2 自評

- 本時が指導案の計画と少し変わってしまったのは、生徒が考えたいことや話したいことを優先したからである。
- 授業後の生徒の振り返りから、様々な視点から「枕草子」を読み深めようとしているので、3時間構成では難しそうだと感じている。次は他の章段と読み比べての特徴を捉える予定である。

3 質疑応答

- パフォーマンス課題を生徒にどのように示したのか。また、生徒たちにとって学習課題とパフォーマンス評価がどの程度意識としてつながっているのかを教えてほしい。
- 生徒たちには、単元の最初にパフォーマンス課題を示している。小学校で古典の暗唱をしたが、その段階では、古典作品の魅力を十分には理解できていない状態であった。したがって、生徒の課題意識に合ったパフォーマンス課題だと考える。この単元で「枕草子」の魅力に迫っていくことが、パフォーマンス課題につながっていくと理解できている。それは、生徒たちが立てた問いからも読み取ることができる。
- 「生徒が捉えている古典の魅力」と「細川先生が捉えている古典の魅力」について教えてほしい。
- 生徒は「名文だから、小学校で古典を暗唱したのだろう。」という意識はあると思う。しかし、具体的な魅力はまだつかめていない。一方、私が考える古典の魅力とは、その当時の人の生活やものの見方が、作品から読み取ることができることである。それは、現代と共通している点や異なる点がある。それを知ることができるところが魅力だと考えている。
- 前時の展開についての質問である。教科書に掲載されている作品をあえて現代語訳させた意図を教えてほしい。
- 古典の授業をする際、教科書はあまり使っていない。したがって、生徒たちは教科書の訳は見えていない。難解語句だけ提示して、自分たちの力で小学校の時に暗唱した文章を現代語訳させた。

4 意見

- 古典の文章であっても、生徒たちが細かい表現まで注意して読み込めていた。授業の序盤で、大型テレビで前時の学びを振り返っていた。視覚的に振り返りを提示したことが、本時の学習に生きたと感じる。
- 「この章段が親しまれ、読み継がれてきたのはなぜだろう。」という問いは、古典作品の魅力を見いだす上で、とても大切だと思う。魅力を見つけるために、生徒と読み深めていってほしい。そのためには、当時の生活を意識させることも良いと思う。先ほど「宮中で」という発言もあったが、背景を理解することで、その言葉や表現を選んだ筆者のものの見方や考え方が見えてくるのではないかと。また、比較して特徴を把握することも大切だと思う。季節ごとの比較、他の章段との比較、それらを通して、「枕草子」の魅力に気付いていってほしい。

5 指導助言

授業を通して、生徒たちはよく考えていた。確かに発言はぼつりぼつりだったかもしれないが、「枕草子」の言葉と向き合って、深くまで考えているからこそだと思う。

生徒たちは、授業に向かう構えができていた。それは、日頃から言葉や表現に迫っていく検証する読み方ができているからだと思う。また、細川先生が、生徒の振り返りをもとに、読み深める視点を設定していたからだと思う。

生徒主体の学びになっていた。教師が求めることではなく、生徒が考えたいことを考え、学ぶというスタイルの授業であった。そのことは、生徒の姿にも反映されていた。「三つ四つ」「二つ三つ」という表現に最初着目した生徒は、対象が「雁」というように捉えていたように聞こえ

た。しかし、後で別の生徒が「三つ四つ」「二つ三つ」は「鳥」についての表現だと訂正した。生徒たちが、言葉や表現に自ら迫っていく姿勢がなければ、できないことだと思う。

「わろし」に関することで二点気になった。

一つ目は、2班と5班が立てた「わろし」に関する問いの示し方についてである。「なぜ最後に『わろし』と書いたのだろうか。」という問いは、第1段の構成に着目した問いだと思う。一方、「なぜ冬だけ『わろし』と書いたのだろうか。」という問いは、季節ごとの表現を比較した問いだと思う。せつかく言葉や表現に迫っていく読み方ができている生徒たちなので、思考の違いが分かるように示してはどうかと思う。

二つ目は、「わろし」の捉え方についてである。「わろし」は、全然だめという意味ではない。好ましくない、考慮する余地があるというニュアンスである。そのニュアンスをつかめるようにさせると、ただ「をかし」と対立する言葉という以外にも発見があるかもしれない。